

## 成果の出る総合型選抜のコツ②

# 育て続ける学修者本位の 入学前教育のしくみ

### 入学前教育を巡る、大学と入学予定者のギャップ

入学前教育の多くは、合格後から入学までの空白期間を埋めることを目的に実施されてきました。今ではその考えは通用しなくなってきたと感じます。年内入試の拡大や入試方式の多様化が進み、すでに多様な学生が入学している大学も多いでしょう。入試方式間の学力差が広がり、一律の指導が困難になっている大学もあるようです。こうした状況下で、卒業時に全学生に一定の質を保证するためには、入学前と入学後の教育を切り離さず、高校生を志望者に、志望者を入学者に、入学者を自学の教育で成長する学修者にと、シームレスに育成していく視点が必要ではないでしょうか。

入学前教育を連続性のある教育のひとつとして機能させるために、3つの観点から点検をすることをお勧めします。①目的は明確に定められているか。入学後の教育とのつながりを踏まえ、入学者をどういう状態にするのか。取り組んで欲しいものが多い場合、目的に照らして優先順位を検討する必要があるでしょう。②入学者本人が自分のための学びだと思えるものか。高校の学習範囲の補填として課される入学前教育は、大学側の視点では必要なものですが、受ける側からすれば「強制的な復習」で、入学後の学びとのつながりが見えにくいものです。「これまでの復習」ではなく、入学後の学びにつながる「これからの学びの準備」として、自身の成長や目標の実現に役立つと感じられるものであることが重要です。③入学後の指導に生かせるデータが得られるか。入学者の傾向をいち早く把握できれば、連続性のある教育の実現につながります。

### 個人差への対応の「しくみ」と学びを自分事にする「しかけ」

入学前の段階では個別の指導は難しく、入学前教育は一律の課題を課するのが一般的です。しかし、入学者が多様になればなるほど、入学者間の学力差が拡大する傾向があります。入学者本人が自分で学修に必要な能力基準を理解し、不足する力を自主的に補うことができればよいのですが、なかなかそうはいきません。そこで、注目されるのは、AIの活用です。個々の学習者に対して、目標に向

(株)進研アド  
教育事業本部商品部  
部長

## 村上 宙

むらかみちゆう ● 2014年  
入社。大学の国際化やグ  
ローバル人材育成、教育改  
革支援に携わる。2024年よ  
り現職。



けて必要な次のステップを判断し、適切な課題を出すことで、学習者は自分に合った学習を進めることができます。AIの活用は、個人差という問題の一つの解決策になりえるでしょう。

ただし、AIはあくまで「しくみ」です。AI活用の有無にかかわらず大切なのは、入学者が自分事としてやり切るための「しかけ」です。入学者本人が自分のための学びだと思って取り組むことができる「しかけ」は別途用意する必要があります。

### 育て続けてくれる教育環境づくりで選ばれる大学へ

入学前教育の実施が当たり前になった今、それ自体は優位性になりづらいのでは、という声を伺います。しかし、年内入試合格者の大半は、大学の学びについていけるか不安を感じています。入学後につながる学びを提供し、入学前から育てる環境がある、となれば、受験生や保護者にとっての安心材料となります。入学前教育の見直しは、学生募集にも好影響をもたらすでしょう。そして、入学後も前向きに目標をもって学び続ける学生が増えれば、出口の成果も出やすく、結果的に自学の魅力を高めることにつながるはずです。

入試選抜・入学前教育・入学後の教育を、それぞれ独立したものではなく、連続性をもった育成の枠組みに変えることで、入学者が目標を保ち続ける、学修者本位の教育が実現できるはずです。下記のチェック項目を参考に、自学の入学前教育を見直してみたいかがでしょうか。

### 【図表14】入学前教育の課題チェック

#### ↓一つでも当てはまったら見直しを

- 入学者の学力格差が拡大している
- 入学前教育に関して入試と教務、学部の連携がない
- 入学前教育から得られるデータを活用できていない
- 学習の不足を埋めることだけを目的に課題を出している
- 入学前教育の課題をやり切るかどうかは学生任せ